みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

SER no.086; まえがき

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008620

梅棹・及川・松原編『梅棹忠夫著作目録（1934-2008)』
国立民族学博物館調査報告　86:i-ii (2009)

まえがき

本書は，1934 年から 2008 年まで 75 年間にわたる梅棹忠夫の全著作目録である。この著作目録は，梅棹の米寿（88 歳）をひとつの区切りとして編まれた。梅棹自身は，現在もなお活発な著作活動を継続している。本著作目録は，梅棹の人生におけるひとつの中じきりとして刊行されるものだ。

『梅棹忠夫著作目録（1934–2008)』は，第 1 部と第 2 部から構成されている。第 1 部は，著作目録にかかわる解説と編集にあたっての論考である。ここには，梅棹忠夫「著作目録をつくる」，同「著作目録の増補・改訂」，松原正毅「幻視の行為者」，及川昭文「梅棹忠夫著作目録データベースをつくる」の諸論文がおさめられている。第 2 部は，厖大な著作目録の本体である。

共編者の松原の論文は，梅棹の著作の全体像と意味，その背景にある知的構造をとりあつかったものだ。これは，同時に梅棹についての学問的評伝をかねている。共編者の及川の論文は，長期間におよぶ梅棹の学問的業績を電算機処理する過程で生じた問題などを詳述したものである。著作目録のデータ処理について，類例のすくない事例を提供している。

梅棹の論文「著作目録をつくる」は，みずからの還暦にあたって作成した私家版の『梅棹忠夫著作目録』（中央公論社）の序文として執筆されたものだ。1979 年 6 月に刊行された本書は，「梅棹忠夫著作集」を編集するための基礎作業としての役割を担っていた。中央公論社刊の「梅棹忠夫著作集」は，1989 年 10 月から刊行をはじめた。私家版著作目録の完成から著作集の刊行開始までには，10 年の歳月が経過している。この間，1986 年 3 月に梅棹は視力をうしなった。1994 年 6 月に完結した著作集全 22 巻，別巻 1 巻の編集作業と刊行は，すべて梅棹の視力喪失後になされたものである。

『梅棹忠夫著作集　別巻』に，当初においては 1993 年までの梅棹の全著作目録を収録する予定であった。残念ながら，年譜と総索引を中心に編成した別巻はそれだけで大部なページ数になったため，著作目録の収録を断念せざるをえなくなった。その結果，「梅棹忠夫著作目録」は公刊されていない。

梅棹の論文「著作目録の増補・改訂」は，1979 年の私家版の著作目録刊行後に生じた著作目録作成をめぐる問題を克明にしるしたものである。ここには，私家版の著作目録刊行後 30 年ちかくの年月のなかで展開した出版形態の変化についての記録もみられる。

梅棹忠夫が著作目録の作成にかける情熱は，人一倍のものといえる。この間の事情は，「著作目録をつくる」と「著作目録の増補・改訂」のふたつの論文に詳述されている。これを集約すると，みずからの人生の記録をみずからが正確にのこすべきだと

いう主張になるであろう。とくに研究者においては，みずからの研究の軌跡は本人でなければ記録としてのこすことは不可能だということになる。この主張は，たいへん妥当なものといえる。梅棹と同時代をともにした研究者，さらに梅棹の後世につづく研究者は，この主張に耳をかたむける必要があるだろう。『梅棹忠夫著作目録（1934–2008）』は，書誌学上の意味だけでなく，ひとりの研究者の人生の区切りのしかたとして意義深い事例を提示しているといえる。

『梅棹忠夫著作目録（1934–2008）』のデータ作成をおこなううえで，人間文化研究機構のデータベース・システム nihuONE の活用が基盤となっている。本書の編集にあたっては，三原喜久子さんと明星恭子さんの，永年にわたる秘書としての献身的なお力添えがあった。このおふたりのお力添えによって，本書の刊行がはじめて可能になった。編者として，三原，明星のおふたりに謝意を表しておきたい。

編　者